

私たちが忘れてしていること。 神奈川から「沖縄」を考える。

上陸演習を行う海兵隊

一枚の写真があります。

写っているのは海岸で敵前上陸訓練を行うアメリカ海兵隊です。沖には揚陸艇が浮かび、兵士は銃をかまえて匍匐前進しています。

この場所はどこでしょう？

背景に、特徴のある島が見えます。

江の島です。



戦後の一時期、藤沢から茅ヶ崎にかけての湘南海岸にはアメリカ海兵隊の演習場があったのです。烏帽子岩は砲撃の標的とされ、今の形に姿を変えました。

流れ弾が人家に飛び込む事故も起きました。米兵による犯罪も相次ぎ、茅ヶ崎市議会は海兵隊の移転決議をあげます。藤沢でも移転を求める声が上がります。

こうした「基地反対運動」の結果、1953年に海兵隊は移転していきました。そして、私たちはそんな歴史があったことさえ忘れていきました。

ですが、私たちが忘れてはならないことがあります。それは海兵隊は「移転」したにすぎない、ということです。では、どこに移転したのでしょうか？

沖縄です。

私たちはそのことを忘れ、まるで他人事のように沖縄の基地問題を語ってはいないでしょうか。あたかも東京電力（東北電力ではない）の原発を福島に押しつけ、日々の安寧な暮らしを送ってきたように。

普天間基地をめぐる言説

「他人事」どころではありません。最近“本土（※注）”の一部の人々から、基地に反対する沖縄に対し悪意に満ちた誹謗中傷さえ行われるようになりました。

たとえば作家の百田尚樹は2015年6月、自民党の若手議員を集めた勉強会の席上、こう発言しました。

もともと普天間基地は田んぼの中にあつた。周りに何もなし。基地の周りが商売になるということで、みんな住みだし、いまや街の真ん中に基地がある。そこを選んで住んだのは誰やと言いたくなる。

まさにフェイク（デマ）と言うべきでしょう。

現在普天間基地のある場所はかつて10の集落があり、約9000人が住んでいた町の中心街でした。沖縄戦のあと住民が捕虜として収容されている間にアメリカ軍はここを一方向的に接収して基地にしました。



海兵隊普天間基地

父祖から受け継いだ土地です。基地の敷地内に祖先の墓のある家もあります。人々は基地の鉄条網にしがみつこうにして、基地が返還されるのを待ち続けてきました。「選んで住んだ」わけではありません。

ですが、百田のようなデマは拡散します。昨年、アメリカ軍ヘリコプターの窓枠が落下した普天間第二小学校にも、「そんなところに学校を作ったお前たちが悪い」という電話が殺到しました。

昨年1月、東京MXテレビの番組「ニュース女子」は沖縄・高江のヘリパッド反対運動に対して「反対派は金をもらっている」「反対派の妨害で救急車が行けない」などという事実無根の報道を行い、BPO（放送倫理・番組向上機構）から「重大な放送倫理違反があった」と指摘されました。

なぜ、基地被害を受ける側がバッシングされなければ

ばならないのでしょうか。

去る8月、沖縄県の翁長知事が亡くなりました。沖縄自民党の重鎮だった翁長氏が政府の方針に真っ向から反対するに至った理由を、知事は生前こう述べていたそうです。

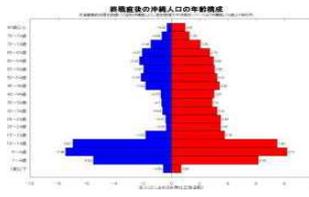
「なぜ、沖縄への基地集中が変わらないのか。本土の無関心のせいではないのか」
(注) “本土”とは植民地に対する宗主国をあらわす言葉ですが、ここではあえて“ ”をつけて使います。



沖縄のつぎは湘南が上陸地点

神奈川にとって沖縄が「他人事」ではられない、もうひとつの歴史があります。

沖縄戦の特徴は、一般の住民が住む町や村が舞台となった「地上戦」だったということです。それがどれだけ苛烈なものだったかは、終戦直後の沖縄の人口ピラミッドがあらわしています。



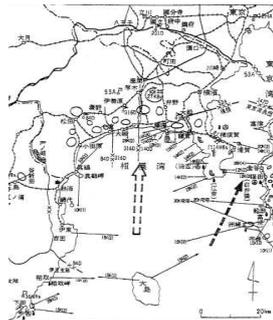
戦後の沖縄の人口ピラミッド

凄惨な戦いによって亡くなったのは、一般住民約10万人を含め約20数万人といわれています。特に10～30代の男性で生き残った者はほとんどいません。

この沖縄戦ののち、日本は広島・長崎への原爆投下を経て無条件降伏をします。ですが、もし日本が降伏せず“本土決戦”が行われた場合、沖縄に次ぐ地上戦の舞台はどこになるはずだったのでしょうか。

アメリカ軍は“本土決戦”に向けてコロネット作戦という作戦を立てていました。

右はその作戦計画図です。地図が示す上陸地点は、相模湾でした。つまり私たちの湘南は、沖縄をさらに上回る凄惨な地上戦の舞台となっていたかもしれないのです。



コロネット作戦

それに対抗するため、江の島には今も相模湾をのぞむ砲台跡が残ります。荏原製作所のある一帯には特攻機の発進する滑走路もありました。鎌倉の稲村ヶ崎にも「伏竜特攻隊」という爆弾を抱えた水中兵の出撃基地跡が残っています。



江の島の砲台跡

湘南地域にとって、沖縄戦はあり得たかもしれない「もうひとつの歴史」の姿なのです。

普天間の人々のその後

普天間基地の歴史は、さらに続きます。

いま藤沢の学校には、多くの「外国人」の子どもたちが通っています。その中には、「知念さんというブラジル人」や「眞志堅さんというポリビア人」の子どももいます。

なぜ「知念」「眞志堅」などという沖縄に特有の苗字を持っているのでしょうか。それは、その子どもたちが沖縄にルーツを持つ日系移民の子孫だからです。

沖縄はもともと海外移民を多く送り出してきた地域です。ペルーの日系人に至っては、その9割は沖縄にルーツを持っています。

この移民は戦後も続きました。沖縄戦で沖縄のあらゆる産業は壊滅的な打撃を受け、生活するには海外に道を求めるしかなかったからです。

特に、普天間基地に住居や農地を奪われた人たちは深刻でした。このままでは社会不安が起きかねないと危惧したアメリカ軍政局は、救援策を打ち出します。それは、その人たちをポリビアに集団移住させるというものでした。

移住に応じた人たちは移住したポリビアの開拓地をこう名付けました。「コロニアオキナワ」と。

やがて、日本が南米の日系人を労働力として受け入れるようになると、この沖縄移民の2世、3世も日本にやってくるようになります。藤



コロニアオキナワ

沢市の湘南台は一時、沖縄系ポリビア人の拠点のひとつとなりました。これが、「知念さん」や「眞志堅さん」が藤沢の学校にいる理由です。そして、中にはごく少数ですが、普天間基地に土地を奪われた人たちの子孫も混じっています。

藤沢上空を飛ぶオスプレイ

このごろアメリカ海兵隊の新型輸送機オスプレイが藤沢の上空を飛び始めています。沖縄で繰り返されたオスプレイの事故が、藤沢で再現されないという保証



辻堂駅上空のオスプレイ

はありません。私たちが「無関心」でいるうちに、状況は「他人事」ではなくなりつつあります。

「沖縄の問題」ではありません。沖縄に様々な矛盾を押しつけて省みない「私たちの問題」として、沖縄の基地問題を考えるべきではないのでしょうか。